

# 英雄cp妄想

あほうどり

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エクス・アルビオのCP短編をたまにあげます

pixivにもあげています

# 目次

e b t g 夢	e b n a おまけ	独占欲 e b n a	e b u r
—	—	—	—
41	36	27	1



## e b u r

頭上に広がる雲ひとつない空。

夏が近づいてきたせいか日差しは強く、額には僅かに汗が滲む。

優等生につもりなんて無いけど、それでも、他のみんなが授業を受けているのに一人だけサボるのは、多少罪悪感があった。

「……めんどくさい」

私をもっと適当なら、罪悪感も感じることなくサボってるだろう。

私をもっと真面目なら、サボることなく高校生活を謳歌しているだろう。

だけど、結局私は中途半端でしかない。

自分の思考を断つように、隣に置いていたペットボトルの蓋を開ける。

プシュツという音と喉を刺す炭酸は、今日の空に似て、憎たらしいほど爽やかだ。

「何やってんだろ、私」

クラスみんなは優しいし、教室の居心地だって決して悪くない。

なのに何故か逃げ出したくなるのは、私がどうしようもない人間だからだろうか。

腰掛けていた高めの段差から降り、ゴツゴツして最悪なコンクリートに寝転がる。

視界いっぱい青い天井は、私と違って元氣そうだ。

全身の力を抜いてブーツと空を眺めていると、ふと何かの音が鼓膜に届いた。

規則的に響くそれに耳を澄ます。少しずつ大きくなる軽快な音は、どうやら足音の

ようだ。

どれだけ待っても聞こえてくるのは一人分だけで、それはつまり、授業で屋上を使ったりするのではないと言うこと。

もしかしたら、担任が私を連れ戻しに来たのかもしれない。

そう考えて体を起こし、ペットボトルを持って、備え付けのソーラーパネルの陰に隠れる。

いつまでも隠れ続けるのは無理だろうけど、一瞬だけなら誤魔化せるはずだ。

息を潜め、金属製の扉をじっと覗く。足音は階段を登り始めたくらいで、数秒後に

はその扉の向こうに辿り着くだろう。

来た……！

扉の前で足音が止まり、ドアノブが捻られる。

扉が開き始めたタイミングで顔を引っ込めて、覗くのを辞めた。

「え、なんか開いてね。まじか」

耳に届く男の声。

聞き覚えの無い声で、少なくとも担任では無いのは確か。  
もう一度陰から顔を出す。

後ろ姿しか見えないが、紺色のブレザーを見るに同じ生徒だろう。  
染めているのか、綺麗な色の金髪が、陽の光でキラキラ輝いている。

「はぁー……」

大きく脱力。

先生かと警戒してみれば、やって来たのは私と同じサボリ。 さっきまでの緊張を返して欲しい。

私が座っていた場所に腰掛けてスマホを弄るソイツは、まだ私に気付いてないみたいだ。

「ちよつと」

「うおえ!」

ソーラーパネルの陰を出て声を掛ける。 驚いて叫び声を上げる金髪の男。  
私に振り向いた顔は、此方こそ驚いてしまうくらいには整っていた。

「そこ、私が座ってたんですけど」

「え、え? あなた誰ですか!?! あなた誰!?!」

「そつちこそ誰ですか?」

「え、あ、私エクス・アルビオって言います……」

エクス・アルビオ。聞き覚えは特に無い。

学年証は私と同じ一年を示しているけど、金髪でこんなに背の高い男は入学式でも見た記憶が無い。

「あの、どちらさまですか……?」

ずっと同じ質問をする金髪の男ことエクス・アルビオ。

答えなくてもいいけど、向こうの名前を聞いた以上は答えてあげる方が良いか。

「私一ノ瀬うるはつて言います。エクスさん? はサボリですか?」

「あ、はい、サボりつす。あとエクスアルビオって言いにくいならエビオでいいつす

よ」

「エビオ……?」

ニツクネームだろうか。斬新というか独特というか、名前から変な切り取り方を見ている。

というか、初対面でニツクネームを呼ぶのは中々ハードルが高いのだが。

「そこ座つていいですか?」

「あ、はい。どうぞ。一ノ瀬さんもサボりつすよね?」

「そうですけど」



「つすよねー」

距離感を掴めない気まずさ。

初対面のサボリ同士、何を話せばいいのか全く分からない。

どうすればいいのか分からず、持っていた炭酸飲料を呑む回数だけが増えていく。

「あー、一ノ瀬さんって何組ですか？」

「私は2組です」

「2組って事は、あれか。小森めとって居ますよね」

「え、エクスさんってめとの事知ってるんですか？」

エクスさんの口から出た予想だにしない名前に驚く。

めとは小さい頃からの幼馴染で、私の親友とも言える存在。エクスさんという

関わりがあるのか、かなり興味がある。

「僕の友達がそのめとさんの友達で、そこ繋がりと一緒にゲームしてるんですよ。偶  
に。まだ直接会ったのは2回だけですけどね」

「へえ、じゃあめとは友達なんですね」

「つすね。なんか適当に話しても通じるから楽しいつす」

「ふーん……」

屋上で出会った同じサボリ魔が友達の友達だった、なんて凄い偶然だ。

こうして話している感じ、めととエクスさんは気が合いそうだし、仲良くなるのも頷けるけど。

「私めとと幼馴染なんですよね」

「へえ、凄いですね。　なんかこういう事あると、世界狭いなって思います」  
「ですね」

ポツポツと続いていく会話。

気まずさはあるけど、一人で憂鬱な時間を過ごすよりはこっちの方がいい。

知らない人と話すのは得意な方では無いけど、完全な初対面だからこそ話題には困らないし。

「エクスさんって何組なんですか？　入学式で見た記憶無いんですけど」

「俺3組です。　入学式は普通に寝坊したんで参加してないです」

「え、ほんとに言ってます？」

「やばいつすよね。　全然春休みの気でいたら入学式当日でビビりましたもん」

話しながらコロコロと表情を変えるエクスさん。

よく笑うし、不思議と良い人そうなのが伝わってくる。

まだ会ったばかりだし、実はクソ野郎の可能性もあるけど、ちゃんと仲良くなりたいたいと思える人だ。

「俺、またここ来てもいいっすかね。一ノ瀬さんが嫌なら違う場所探しますけど」  
「いや、良いですよ。私もずっと居るわけじゃないし、エクスさんが自分で見つけた  
じゃないですか」

「つす、じゃあ偶にサボりに来るんで、その時はよろしくお願いします」

エクスさんが勢いをつけて段差から立ち上がるのと同時に、授業の終わりを知らせる  
チャイムが鳴った。

「俺今日はもう帰るんで、また会ったら仲良くしてください」

「此方こそ、これからよろしくお願いします」

軽く頭を下げ、手を振りながら去っていくエクスさんを見送る。

最初はどうなるかと思っただけど、なんだかんだ良い結果になって良かった。

校門を出ていく2人組を見下ろす。

次に会うのは何時になるだろう。

★★★

チャイムが鳴った瞬間教室を飛び出す。

この数日間ずっと真面目に授業を受けていた反動か、今にも息が詰まりそうだ。

人が見ていないのを確認して屋上への階段を登り、金属製の扉を押す。

風が強く吹き込んできて、夏特有の少しじめつとした空気を感じる。

青空に晒されたコンクリートに1歩踏み出すと、いつもの場所に座るサボリ魔を見つけた。

「ういーす、エビオさん久しぶり〜」

「お、のせさんじゃん。久しぶり。1週間ぶりくらいじゃん」

「うち超頑張ったわ……。もうマジでしんどい」

倒れ込むように段差に腰を下ろす。

日光の力によって熱を持ったコンクリートは、スカート越しに私の体を焼こうとしてくる。

「のせさんこれ敷きな。熱いでしょ」

「マジ助かる〜」

エビオさんから柔らかいタオルを受け取る。

有難くお尻の下に敷かせてもらうと、格段に座りやすくなった。

「ほんとにしんどそうね。これ口付けてないから飲んでいいよ」

「至れり尽くせりじゃん」

もらったカルピスの蓋を開け、ペットボトルを傾ける。

冷たさと甘さが、まるで身体の隅々まで染み渡っていくみたいだ。

「つはあ、ありがとねエビオさん。お陰様で生き返ったわ」

「のせさん相当疲れてそうだったしね。ここでのんびりしようぜい」

「ねー」

狭い段差の上で上半身を倒す。

真上には、やる気を出し始めた太陽がこれでもかと輝いていて、半袖だと言うのにとつともなく暑い。

腰付近はタオルがあるけど、肩甲骨なんかはコンクリートの熱まで伝わってきている。これじゃ休めるわけが無い。

「ねえエビオさん、寝れないんだけど」

「じゃあ日陰に行けば良くない？」

「つままない男だね」

「は？ やばお前」

中身の無い会話の途中で、柔らかい何かが突然顔に被さる。

びっくりして持ち上げたそれは、私が敷いているものと似たタオルだった。

パツと顔を上げると、金髪の上半分が段差から突き出している。

エビオさんは段差を背もたれにして、地面に座っているみたいだ。

「ありがとうエクスさん」

「疲れてるなら早く帰った方がいいぞ、マジで」

「ちよつと寝たら帰る……」

貰った2枚目のタオルを背中に敷く。

ぐつと体を伸ばすと無意識に欠伸が零れた。

先週の木曜から1度もサボることなく迎えた金曜日。

他のみんなと過ごすのは楽しいし、授業だつて嫌じゃない。ただ、時々こうやつて

息抜きをしないと息が詰まる。

……そういえば、エビオさんは何でここにいるんだろう。

頭の片隅に湧いた疑問。

エビオさんとは一月くらいの付き合いだけど、私の知る限り、エビオさんは私みたい

に息抜きが必要な性格とは思えない。

勿論私が見たものが全部じゃないだろう。だけど、私に似ているとはどうしても思

えない。

「エビオさんは何でサボってんの?」

「え? めんどくさいから」

返ってきた簡潔な答え。

なんともまあエビオさんらしい返事に、思わず笑ってしまう。

「勉強とか好かんのよな、俺。最低限しか受けたくない」

「エビオさん真面目に授業とか受けそうなのにな」

「そう？ サボれるなら普通にサボるよ」

話しながら私の方へ振り向くエビオさん。

金色の髪も空と同じ色の瞳も、白いシャツと相まって夏空によく映える。

「エビオさん顔良いしめっちゃ目合うし、普通にモテそう」

「うわ、そういうこと言うんだ。モテないのにモテそうって言われた時が人間いっ

ちやん傷つくんだから」

「おもしろ」

傷口を抉ってしまったみたいで、エビオさんが呻き出す。

エビオさんに恋人が居ないのは少しだけ驚きだ。

イケメンだし性格も良いし、たまにデリカシーが抜けてることを気にしなければ幾らでも恋人なんて作れそうなのに。

意味もなくエビオさんの恋愛事情を考えながら目を閉じる。

深呼吸をすると、息を吐くのに合わせて体の力がゆっくりと抜けていき、眠気が瞬間に全身を支配していく。

……流石に男子の前で寝るのはやばいかな。  
意識が落ちる直前に浮かんだ思考は、そのまま黒に塗りつぶされた。

どこから聞こえる誰かの声。

それはとても聞き覚えがある気がして、誰だろうと考える。そして、今私が寝ていることを思い出した。

「のせさんー！」

強めに体を揺すられ、瞼が開く。

「ガチ寝じゃん。もう帰るよ」

「え、めと……?」

のっそりと体を起こすと、目の前には何故かめとが立っていて、ついさつきまで真上にあつた太陽は大きく傾いている。コンクリートも今は熱いという程でも無い。

上手く働かない頭のままカルピスを口に含む。冷たかったはずのソレはすっかりぬるくなっていた。



「……え、もう夕方?」

「もう5時過ぎてる。エビオさんが教えてくれなかったら、のせさんここに取り残されてたよ」

呆れた表情のめとを見て、だんだん状況が飲み込めてきた。

周囲を見回してもエビオさんの姿は無く、私使っていたタオルだけが取り残されていた。

「エビオさんは?」

「ちよつと前までここに居たみたいよ。流石に時間やばいからって言っただけ私んここに

来たもん」

「まじかあ……」

今までの人生、学校でここまで熟睡したことは無い。

寝顔とかタオルとか申し訳なさとか、色んな単語が頭のなかでぐるぐると渦を巻く。

ついさつきまで。という事は、5時前くらいまでは私が起きるのを待つていてくれたと考えていい。

学校は4時頃に終わる。つまり、私は1時間近くエビオさんを待たせていたわけだ。

「死にたい」

罪悪感と羞恥心で顔を覆う。

親しくなったとはいえ、流石に油断しすぎでは無いだろうか。

ちゃんと迷惑をかけるのも、寝顔を見せるのも、覚悟が全く足りていない。

「荷物持ってきてあげたから、さっさと帰るよ」

「ごめん、ありがとう」

通学用のカバンを受け取り、エビオさんのタオルをその中に仕舞う。

明日にでも洗って返そう。

「のせさんここでサボってたんだね。エビオさんが屋上に上がってるのは知ってた

けど、サボり仲間的な？」

「そんな感じ。1人よりも退屈しなくていいわ」

「うちも今度サボり来ようかな」

「まじ？ ちなみに今の時期めちやくちや暑いよ」

寝てる間にすっかり人気の無くなった校舎を2人並んで降りていく。

「エビオさん、明日も屋上来るかな」

窓から覗いた夕焼けに染まりかけた空は、サボり魔の髪と同じ色をしていた。



夏真つ盛りの屋上、話し声のバックに夥しい量の蝉の声。

日をたつぷり浴びる椅子替わりの段差とはサヨナラして、今は2人並んで日陰の中。地面がひんやりしていて気持ちいい。

「エビオさん、イブラヒムさんと付き合ってるの?」

「え、付き合っていないけど、なんで?」

最近気になっていたエビオさんの噂を聞いてみると、本人によってバツサリと切り捨てられる。

当然無いとは思っていたけど、まさかここまで呆気ないとは。

「いや、エビオさんとイブラヒムさんが2人でサボってデートしてたって噂で聞いて」「サボってゲーセンとかは行ったけどデートじゃないぞ、別に」

「まあそうだよ。普通に親友って感じるし」

付き合ってるなんて噂が立つくらい、エビオさんとイブラヒムさんは仲がいい。

月に2回くらい、エビオさんは屋上に来たあとイブラヒムさんと帰ってるし、街でも時々2人でいるのが目撃されている。

友達という言葉を中々使わないエビオさんが、イブラヒムさんを親友と言ったときは素直に驚いた。

「エビオさんとうちって友達なん？」

「友達じゃない？ この学校だとのせさんは断然仲良い方よ」

「おー。 ちなみにうちの中でエビオさん3番目だよ」

「それどう反応したら正解なの？」

エビオさんの困り気味なツツコミに2人して笑う。

別に面白いことを言ってるわけじゃないのに、空気感のせいで面白くなってしまう。

笑ったせいで体温が上がったのか、首筋を汗が流れて擦りたい。

「にしても暑くね。 これクーラーついてる教室の方が絶対良い」

「扇風機もつてないの？」

「それどこで買うの？」

「調べたら出てくるよ」

充電式のハンディ扇風機の風を向けると、エビオさんは涼しそうに目を細める。

「逆にエビオさんのそれ、ゴリ押し過ぎじゃない？」

「ちなむとこれ超涼しいぞ」

保冷バッグの中にパンパンに詰められた保冷剤の山。

貸してもらった保冷剤をひとつ首筋や太ももに当てると、当てた部分の熱が急速に奪

われていくのが分かる。

「これ溶けなかったらほんと最強だわ……。 エビオさん？」

横目で見たエビオさんと珍しく目が合わない。

いつもなら、こつちが恥ずかしくなるくらいには目を見て話してくるのに。

「のせさん、保冷剤当てるときにあんまり服とか捲らんでほしい。普通にビビったんだけど」

「あー、そういうこと。 エビオさん紳士じゃん」

「紳士とかじゃないだろこれは」

考えずにやってたけど、確かにスカートとかシャツとか結構ズラしてたかもしれない。

着ている私はあの程度じゃ下着が見えないのがわかるけど、エビオさんからは分かって当然。視線を逸らしたのも納得できる。

「エビオさん育ちいいなって時々思うわ」

「良くは無いです。普通だろ普通」

「その普通が出来ないんだって」

タオルで滴る汗を拭い、奢ってもらったポカ리를一口。

冷たさを失った液体が喉を伝う。

「……もうすぐ夏休みだね」

「ね。のせさん何か予定とかあんの?」

「特には。エビオさんは?」

「友達と6人くらいで旅行行くかも」

「へへ、いいじゃん」

日向と日陰の境目をブーツと眺めながら、エビオさんの言う6人の友達を考える。

めとは……無い。旅行に行くなんて話しは聞いてない。

エビオさんの友達ならイブラヒムさんは入ってるとして、あと5人、誰だろう。

特に意味は無いけどやることもないから考えてみて、はたと気づいた。

「うちさあ、エビオさんのこと思ったより知らなくない?」

イブラヒムさんとめと以外に仲のいい人を聞いた事がない。それどころか、趣味も

好きな食べ物も何もかもを知らない。

屋上で会っても話すのも近況や雑談ばかり。

自己紹介をした事は無く、自分の事もさほど話さない。

記憶を探っているのか、エビオさんは視線を空に向けながらあー……と呟き、軽く頷く。

「言われてみればそうだわ。俺ものせさんのこと全然知らない」

「だよね。なんか自己紹介とかやつとく?」

「今更自己紹介？ 遅くね？」

「でも手っ取り早くない？」

「早くはあるけど、別にそこまで気にしなくても良いでしょ。 1年後とかにはどうせ色々知ってるし」

「え、まあ……そうだね？」

さも当たり前前みたいに1年後も一緒にいる前提で話すエビオさん。

不意をついたその発言に、無性に恥ずかしさが湧いてきた。

コイツ、ほんとに距離感グイグイ詰めてくるな……。

外気に負けじと熱を帯び始めた頬を隠すように、タオルで顔の汗を拭う。

朝からメイクを面倒くさがったおかげで、こういう事をして崩れる心配が無いのは  
気楽でいい。

「エビオさん、これからもサボり仲間としてよろしく」

「おお、よろしく……。急にどうした？」

「何となく言つとこうと思って」

「なるほどね」

下の階から授業の終わりを知らせるチャイムが聞こえる。

横目でエビオさんの様子を伺うも、動く気は無いみたいだ。

私も汗だくのまま廊下を歩くのは気が引けるし、今日の残りは全部ここで過ごすしよう。

最初の頃とは違う、気まづくない無言。

ハンディ扇風機の駆動音と蝉の音が混じる真夏の屋上は、2人なら不思議と過ごしやすい場所だった。



すれ違う人たちの視線を受けながら我武者羅に走る。

まだまだ消える気配のない夏の暑さから汗の雫が流れ、首筋を落ちていく。

特別な何かがあったわけじゃない。ただ唐突に、これ以上は無理だと感じてしまった。

体調が悪いと嘘をついて教室を離れ、人が居ない場所を求めて学校すら飛び出した。屋上に行くことも思いつけないくらいめちやくちな思考で、今はただ前に進むことしかできない。

一人になりたいという漠然とした考えだけでアスファルトの地面を駆け、辿り着いた



のは小さな寂れた公園。

理想通り人は居らず、滑り台やブランコなどの遊具が幾つか佇んでいるだけ。申し訳程度に置かれたポロポロのベンチに腰掛け、乱れた呼吸を整える。

……悪いことしちゃったな。

ベンチにもたれ掛かり、思い浮かべるのは友人達のこと。

いきなり学校を飛び出した私を心配してくれているだろうか。それとも、またサボりだといひ加減呆れているだろうか。

一緒に過ごすのは断じて嫌じゃない。だけど、学校の空気が私にはどうしても耐えられない。

「……ほんとに何してんだろ」

教室にいるみんなと今の自分を想像して、視界がぼやける。

一人にはなりたくないのに、大勢の人と長い時間居ることが苦痛でしかない。こんな面倒な自分が嫌だ。

「寂しい……」

ポロリと本音が溢れる。

誰か一人でいい。誰か、私と一緒に居てくれる人は……。

「……ええ」

スマホがポコンとメッセージの送信音を鳴らし、ハッと我に返る。  
ほぼ無意識のうちに送ったメッセージ。

内容は？ 相手は？ 両手で持った金属板の液晶に目を走らせる。

相手は……エビオさん。メッセージは、『いつしよにいてほしい』……？

全部を理解し、急激に脳が思考速度を速くする。

なんでエビオさんに送った？ めとじゃなくて？ サボり仲間だから？ というか、  
今授業中じゃん。しかもこの内容、メンヘラみたいじゃない？ これどうすればいい？

ぐちゃぐちゃの思考のままメッセージの送信取り消しをタップ。

エビオさんに迷惑かけたいわけじゃなくて……。

「うえっ!？」

爆音を奏でながら震え出すスマホ。

思わず取り落としそうになるのを堪える。

画面にはエビオさんの文字。

……これ、通話？

「……も、もしもし」

『もしもし。のせさん何かあった？』

スマホから聞こえるエビオさんの声。

落ち着きを取り戻していない脳では上手く会話を消化できず、疑問が口をついて飛び出した。

「今授業中じゃないの？」

私が学校を飛び出したのが休み時間で、そこから10分以上経っている。となれば、今は授業が始まったばかりのはずで。

『え、サボってるけど……。今更すぎじゃない？』

私の質問に戸惑うように答えるエビオさんの声。

男の人にしては通りやすいその声を聞いて、胸に巢食っていたモヤモヤしていた気持ちが一粒の涙になって頬を流れた。

『のせさん？』

「……っ、ごめん。場所送るから、暇なら来てくれると嬉しい」

『おっけ。すぐ行くね』

即座に返ってきた返事に胸の中心が締まる感覚がして、左手で抑える。いつの間にか口角も上がっていた。

「じゃあ待ってる」

『はい。じゃね』

「うん」

終了ボタンをタップした時には、まるで生まれ変わったみたいだ。気分は楽になった。

初めて会った時も、今も、エビオさんと話すと鬱蒼としていた気持ちがすつきりする。エビオさんはまるで私の太陽みたいだ。

……………そういうこと、なのかな。

胸を掴んでいた左手を視線の高さに持ち上げる。

エクス・アルビオはただのサボリ仲間で、友達だ。

顔も、声も、スタイルも、性格も良い。 だけど、想像していたような男性像には程

遠い。

そういう考えは、息が上がったエクス・アルビオの姿を見た瞬間に吹き飛んだ。

????????????????  
電話が切れたのと確認し、勢いをつけて立ち上がる。

スマホも財布も持っている。カバンの中のモバイルバッテリーだけが心残りだけど、その辺はイブラヒムに頼めばいい。

メッセージに届いた場所は見知らぬ公園。学校からはそこそこの距離があつて、なんでもそんな場所にいるのか疑問に思う。

「つし、行くか」

重い扉を通つて校舎の中に入り、階段を掛けおりる。これからずっと走ることにするし、スタミナは温存しないと。

一目見た時に受けた、雷に撃たれたと勘違いするくらいの衝撃。

風に靡く黒と青の髪も、憂鬱の色を湛えるアメジストの瞳も、どうしようもないくらいに網膜に焼き付いた。

屋上で後ろから声をかけられたあの瞬間から、俺は一ノ瀬うるはという存在に落ち続けている。

校門を抜け、人の行き交う歩道を走る。

運動が得意な自分に人生で一番感謝した。

こうして頼られておいて到着が遅かつたらかつこ悪い。

出来るだけのせさんにはかつこいいところを見せて、是非とも俺を好きになつて欲しい。

3番目じゃ、満足出来ない。

右手に持ったスマホで道を確かめながら、着々と目的地へと近づく。

今更だけど、汗臭いんじゃないか。でもシーブリーズとか制汗シートはカバンの中じゃん。

どンドン浮かんでくる余計な思考を振り切り、公園の入口に辿り着く。

速度をゆっくり落としながら、奥のベンチに座るのせさんの元へと歩いていく。

「……お待ちせ」

「速いね。……来てくれてありがとう」

目の前まで来ると、のせさんはフツと口元を緩めた。

息は切れて。汗だけで。

でも。

少しだけ潤んだ瞳で微笑むその顔を見ただけで、走った甲斐があった。

## 独占欲 e b n a

洗面所の鏡に映る上裸の俺。

シャワーを浴びる前は寝起きだったこともあり、不覚にも気が付かなかつた。だが、シャワーを浴びた今は血色が良いのもあつてソレがよく目立っている。

深呼吸で自分を落ち着けて、シャツに腕を透す。

脱衣場からリビングへと通じる扉を開くと、のあさんがソファに座つて寛いでいた。後ろから首に腕を回して凭れ掛かる。

柔らかい髪に顔を埋めると、俺より先にシャワーを浴びたからだろう、シャンプーの甘い香りが鼻をくすぐる。

抵抗する気のないのあさんを抱きしめ、耳元に口を近づける。

「のあさんさ、昨日俺が言ったこと覚えてる?」

「何が? ていうか髪ちやんと乾かしなよ。事務所行くんでしょ?」

「そうなんだよ、俺事務所行くんだよ。なにこれ?」

のあさんから腕を離してシャツの襟元を引つ張り下げる。

首から鎖骨くらいまでをのあさんに見えるように晒すと、のあさんは首を反らして俺

を見上げた。

ついさつき鏡で見て気がついた、首筋から鎖骨にかけてポツポツと浮かぶ紫斑。

人によっては虫刺されや痣に見えるかもしれないけど、これが何か、わかる人にはひと目でわかるだろう。

「見えるところにキスマーク付けないでつて言ったよね？ 俺。 しかも俺が寝てる時に付けたでしょ」

そこまで余裕があつたわけじゃないが、昨日の夜に付けられた記憶は全くない。

つまりのあさんは、わざわざ俺が寝てる間にキスマークを付けたことになるわけで。俺を見上げる翡翠の瞳が俺の顔から首元へと移る。

そして、こちらへ体を向けたのあさんが、今度は俺の首に腕を回して俺を抱き寄せた。首筋に柔らかいものが当たる感触。

「……俺怒っていい？」

「——っは。 だめ」

長いリップ音の後に残る赤い痣。

新しく増えたキスマークを見て嬉しそうに微笑むのあさんは可愛いが、この流れで更に増やすのはちよつと俺を舐めすぎだと思う。

絆創膏をつけたところで、数が数だけにバレるのも目に見えている。



えらくご機嫌なのあさんに対し、俺は人前に出る気分じゃ無くなっていた。

「せめて理由は聞かせてくれん？　じゃないとほんとに怒るよ」

湿って重くなった前髪越しにのあさんへ視線を送ると、のあさんは首を傾けてキョトンとした顔を見せる。

「だってエクスさん、事務所行くんでしょ？」

「そうだけど」

「にじさんじってめっちゃ人多いし、他の人にエクスさん狙われるかもしれないじゃん。

だからアピールしとこ思て」

のあさんからの返答に動かしていた手が止まる。

嫌がらせとかのネガティブな理由じゃない事は分かってたけど、え？

俺が他の人に靡くと思われてる？　嘘でしょ？

「俺、ちゃんとのあさん一筋だけど」

「そんなん分かつとるわ。でもそれとこれとは別で、ぼくのエクスさんって見て分かるようにしときたい」

俺の顔から襟元までを眺め、のあさんが満足気に答える。

可愛らしい独占欲を見せられるくらいに愛されているのは嬉しいけど、本当に無関係の人にまで見られる俺の身にもなつて欲しい。

「スタッフさんにまで見られんの、シンプルにめっちゃ恥ずい」

「まあ、ぼくを選んだエクスさんの責任ってことで。ちな、今更逃がさへんからな？」  
「いや逃げんけども。あー、これ絶対弄られるに決まってるわ」

今日はなるべく事務所に人が少ない事を祈るしかない。

仲良いライバーならともかく、ほぼ関わりがない人に見られるのが一番恥ずかしい。

恋人からのマーキングの跡をさすりながらソファに腰を下ろす。

手触りに変わりは無いけど、愛されてるのが指先に伝わってくる気がした。

……………次に事務所行く時のあさんに伝えるようにしよう。



全身鏡の前で体を回す。

メイクOK、髪の設定もOK。服もちやんと可愛い。

セナとの約束の時間までには余裕があるし、待ち合わせ場所まで歩いて向かつても間に合う。

カバンに最低限の貴重品を詰めて肩にかける。

準備を終えて自分の部屋を出ると、エクスさんがリビングから顔を覗かせた。

「のあさん、今日俺の香水使う？ この前好きって言ってたやつ」

エクスさんが右手に持った小瓶を揺らす。そういえば一昨日にそんな話もしたっけ。

エクスさんいつもが使っている、爽やかで優しいエクスさんらしい香りの香水。

気持ちは有難いし、付けたい気持ちも無いわけじゃないけど……。

「ごめん、もう自分の付けちゃったんだ」

「あー、おっけー。行く時気をつけなよ」

「うん、ありがと」

特にガツカリした様子も無くリビングに戻っていくエクスさん。

わざわざ覚えててくれたのだろうか。だとしたら、ちよつとは嬉しい気持ちがない

でも無い。

『気をつけなよ』なんて、心配ならちよつとくらい着いてきてくれればいいのに。

そんな事を考えながらブーツを履いていると、再びリビングのドアが開く音。

他に用事があったのかと思つて後ろを振り返ると同時に、ぼくの隣に何か置かれる。

「今日俺のパーカー着ていきな。ちよつと寒くなるらしいから軽く畳まれた白いパーカー。」

エクスさんが愛用していて、ぼくも度々使っているものだ。

「エクスさん今日使わんの?」

数ある洋服の中でも、赤い英雄シャツに並んでこのパーカーはエクスさんのお気に入りだったはず。

そう思つて聞いてみると、エクスさんは優しく笑つた。

「俺強いから平気よ」

左手でガッツポーズをつくるエクスさんを見て、ぼくも思わず笑つてしまう。

そういう事なら使わせてもらおう。

「じゃあ借りとくね。いつてきます」

「いつてらっしゃい」

玄関の扉を開いてマンションの廊下に出る。

歩きながら借りたパーカーを羽織ると、ふわりとエクスさんの匂いに包まれた気がした。

待ち合わせ予定の駅前に到着すると、先に着いていたらしいセナがベンチに座って待っていた。

時間は丁度ピッタリくらい。もうちよつと急いでも良かったかもしれない。

「セナ、お待たせ」

「ういーす、のあ先ば……うわっ」

「は？」

駆け寄ったぼくにセナが顔を顰める。

そんな反応をされるとは想像もしていなくて、思ったことがそのまま口から漏れた。

そこまで変な格好はしてはいらずだし、駆け寄ったと言っても髪が崩れない程度の速

度。そんな引かれるような反応をされるのは絶対におかしい。

『『うわっ』てなんや、『うわっ』て。そんな顔される覚えないぞ』

「え、のあ先輩気づいてないの？」

「なにが？」

問いには答えないまま、セナがぼくをあらゆる角度から見回し、顔を近づけてくる。

周囲をぐるぐると回りながら見られるのはファッションチェックみたいでどこか恥ずかしい。

「なにか？」

そのまま1周し、2周目の背中側に行ったところでセナが足を止める。

「……の先輩、これエビオさんの？」

「そうだよ」

サイズ大きいでしょ？ とブカブカの袖を広げてみせる。

後ろに居るから分かりづらいけど、セナが思いつきりため息をついた事だけは分かった。

「なんか、まあ……大事にされてんね」

パーカーのフードを引つ張りながら言葉濁すセナ。

フードの中に何かが入っている感触も無いけど、テープとかが付いていたのだろうか。

「なんかあった？」

「んー、そんな感じかな。 そのパーカー、エビオさんに何て言つて渡された？」

『『今日ちよつと寒いから』つて』

「……ちなみに今日、暖かくは無いけど寒くもないよ」

「そうなの？」

ぼくも天気予報の気温まで覚えてないから分からないけど、エクスさんの勘違いか？

パーカーを着てても暑くないし、別にどつちでもいいけど……。

「まあ着てて良いと思うよ」

投げやり気味にそう言ったセナがフードを被せてくる。

髪もセットしているし抵抗すると、元々本気でもなかったのかすぐにフードから手を離した。

……あれ。　なんか一瞬、エクスさんの匂いが強くなったような……。

「行ッ」

「あ、うん」

呆れたような雰囲気 of セナに並んで、駅の中へと足を進める。

今は何の違和感も無いし、気の所為か。

## e b n a おまけ

事務所のソファで顔を覆う。

視界には自分の両掌しか見えていないのに、前後左右のあらゆる方向からニヤニヤ笑いが向いているのが分かる。

正直、覚悟はしていた。

ここに来る以上は知り合いにもそうでないひとにも会わざるを得ない。何人かに弄られ、広められるのは承知の上だった。

ただどここれはちやうやん。

「ね、エクス。僕には話してよ。僕とエクスの仲じゃん」

「俺、エビオとのあちやんが上手くいつてるみたいで嬉しいわ。なあ、顔上げろよエビオ」

「それにしても虫刺され多くね？　なあエビオ。お前そんなに好かれてんの？　あ、

あくまで虫の話ね」

「無視しないでよエビオさん。折角会ったんだしさあ、俺にだけでも色々聞かせてほしいなあ？」



奇跡的にも今日は、ろふまおとくろなんの収録日。その上どこからか湧いたローレンも参戦し、俺は見事首に付けられた大量のキスマークを追求され始めたのだった。

初めは隠そうとも思っていたけど、絆創膏で隠したところで数が多すぎてバレるし、これから夏に向かう今の時期にターゲットルネックは暑い。

というかそもそも、これだけの知り合いが居るとも思っていなかった。

「エビオさんもキスマークつけてるん？」

「もう頼むからどっか行ってくれ……」

「つれないこというなって。俺らA Q Fで12位とった仲間だろ？」

恥ずかしさと鬱陶しきさでツツコミをする気力も起きない。

見逃してくれるように頼むも、このメンバーが言うことを聞いてくれないのは自明の理だ。

「大丈夫。僕達収録終わったし、まだお昼だから」

「俺らお前の為なら全然飯とか奢るから」

「スプラとかやりたいゲームあつたら幾らでも付き合うぞ」

「なんならスパチャとか投げるしな。赤スパよ赤スパ」

「嫌やー！ もう帰らせてくれー！」

囲まれているは逃げ道なんてないし、英雄のフィジカルを使おうにも葛葉さんが居る

のが厄介すぎる。

有り体に言えば、詰みでしかなかった。

「……ん？」

ふと感じた奇妙な感覚。

自分の左腕の匂いを嗅ぐと何故かエクスさんの匂い——と言うよりは、エクスさんの香水の匂いがした。

だんだん暑くなって脱いだパーカーを左手にかけていたとはいえ、移るほど強い匂いがパーカーに付いているのはちょっとおかしい気もする。

トイレの前で待っているセナの元に戻り、預けていたパーカーを受け取る。

広げて袖や首元に顔を近づけてみると、フードの裏に予想通りエクスさんの香水の匂いが染み付いていた。

「やつと気づいたんだ」

「え、セナ分かってたの？」

「普通に分かるよ。来た時からずっと、のあ先輩の香水と男物の香水の匂いが混ざっ

てるし」

「うえ、まじかよ。最悪なんだけど」

呆れた表情のセナ。今日一日態度がおかしかったのはこれが原因か。

エクスさんなりにぼくの事を想ってくれた結果なのは分かるし、嬉しい気持ちもちやんとある。だけどそれ以上に、ぼくのお気に入りの香水を台無しにされたことに腹が立つ。

「あいつまじ帰ったらこう！ こうしてやる」

「愛されてるじゃん」

ぼくの拳を突き出すジエスチャーに、セナはまるでバカカップルを相手にするみたいに適当に言葉を発した。

玄関のドアが開いた音とヒールが地面にあたる音。続けて廊下を進んでくる一人分の足音。

「おかえり」

「てめえぶつ飛ばすぞ！」

帰ってくるなり、俺の顔目掛けてパーカーを投げつけてくるのあさん。  
バレたか。

「おめーよお、今日ー日ぼくがセナにどんな反応されてたか分かるか？」

「俺もこの前事務所行った時やばかったよ」

「キスマークの方がマシだろ！　なんで香水つけたって言ってるのに、パーカーに香水の匂いつけてんだ！」

のあさんを見るからにご立腹らしく、目を釣りあげて拳を振り上げている。　レッツサーパンダの威嚇みたいだ。

「まじゆるさん。　エクスアルビオ泣かせてやる」

「別れる？」

「別れへんわ！」

「じゃあ良いか」

「なんも良くないですけど？」

後ろから伸びてきた手が俺の頬を全力で引っ張った。  
痛い。

## e b t g 夢

腕を引き抜く。

ぬるりともどろりともとれる、不快な感触。

つい数秒前まで俺と同じ人間だったものが支えを失ったように倒れ、地面を赤で汚し始める。

皮でできた手袋は水分を吸って随分重くなり、茶色かった色は黒に染まって見る影もない。

そこかしこで聞こえる金属音や断末魔をバックに、血で濡れた地面に腰を下ろす。木々の向こうから聞こえる鳥の鳴き声だけが癒しだ。

ポーチから紙を取りだして斜線を1本。これで37本目。

「……長いなあ」

予定では15日ほどで終わるはずが、実際にはその倍の日数経っても終わる気配がない。

体はピンピンしているが、それはそれとしてシャワーが浴びたくなってきたのも事実。

冷たい川の水ばかりだと夜が寒い。暖かいお湯が恋しい。  
ふと目に付いた、さつき殺した人の死骸。

生き物の体内は暖かいという話を思い出し、自分で開けた胸の穴に手を突っ込んでみる。

……いや、思ったほど暖かくは無いな。手触りもぬたつとしてる。

じんわりとした熱は手袋の不快感を増やしただけ。やらなきや良かった。  
手を引き抜いて滴る血を地面に擦り付ける。きつと草木の良い栄養になるだろう。

「——っ、英雄が居たぞ！ 全員こっちに来い！」

背後から聞こえた声。

立ち上がりながら落ちていた拳大の石を拾い上げる。

「おらっ」

振り向きざまに全力投球。

当たればいいやの気持ちで投げた石は見事、叫んでいた男の右肩にヒット。ちぎれ

た腕が宙を舞う。

男の目線が俺から自分の右肩へと移り、口が大きく開く。

「うわ——」

2歩で距離を詰めて右拳を顔に叩きつける。

ぶぎゅつと音が鳴り、男の顔がぐしゃぐしゃにひしゃげた。

仲間を呼ばれる分には構わないけど、絶叫されるのはうるさいし不愉快だ。

男の声を聞いたらしい奴らの鎧が擦れる音が聞こえてきたし、なぐつて血がついた手もいい加減洗いたくなってきた。一旦ここから離れた方がいいか。

幸いにもここは森の中。攪乱は容易だし、本当に運が良ければ追っ手は全員殺せるかもしれない。

紙を入れているのとは反対側のポーチから火打石を取り出し、転がっている死骸の服を剥いで火をつける。

その辺に落ちている枝も焚べれば、まもなくこの辺りを火が覆い尽くすはずだ。

面倒臭いし、今来てるヤツら全員巻き込まれてくれないかな。

もくもくと立ち上る煙を背に川の方へと歩き出す。

ずるずる続いてあんまり長引くと面倒だし、明日は相手の拠点に殴り込みにも——  
「エクス」

か細く、それでも確かに聞こえた声に足を止める。

自分達の拠点側ならともかく、敵地ど真ん中のこの場所に俺の名前を知ってるやつがいるはずが無い。

警戒レベルを引き上げて周囲を見回す。

追っ手以上の人影は無い。草むらにも動物が潜んでいる様子はなく、木々から伸びる影も不振な点は見当たらない。

「エクス」

今度ははつきりと聞こえる声。

どこから聞こえてくるのかが分からないそれは、不思議と聞き覚えのある声にも感じた。

とにかく身を隠そうと、一番近くの樹木の枝に飛び乗る。

俺の重みで太い枝が揺れるも、軋んだり折れたりする心配は無さそうだ。

このまま木の枝を飛び移りながら川の方へ移動しよう。

「エクスー」

小さい手が、俺の両肩を掴んだ。

「——っ！」



体を起こした反動で被っていたブランケットがずり落ちる。

シャツの胸元や脇は汗で湿り、気持ちが悪い。

顔を伝う汗を右手で拭いながら額を押さえる。

……………夢、か。

体の力が急激に抜けていき、手や足が力無く震えだす。

鮮明に呼び起こされた匂いや感触に汗が止まらない。

耳元に心臓があると錯覚するくらいに、動悸が激しくなっていた。

「大丈夫？」

隣から聞こえた、夢の中で聞いたものと同じ心配そうな声。

首を左側へ向けると、月の光に晒された青い髪が柔らく輝いて見えた。

紅い瞳には不安の色が見え隠れしている。

安心させる為にも大丈夫の一言を伝えようとして、だけど、口が思ったように言葉を紡がない。

「……………つ、ごめん」

必死に口を動かして、掠れた言葉を一つ発するのが精一杯。

泣きたいような、イラついたような、寂しいような、ぐるぐるとした気持ちが俺にのしかかる。

命を奪った感觸の残る右手がいやに重く、身体中の震えが止まらない。

こっちの世界に来てからずっと見せつけられる、俺が積み重ねた死体の山。

正しい倫理観を身につけたからこそ、のしかかる罪の重さに押しつぶされそうになる。

「大丈夫だよ、大丈夫……」

頭を抱き寄せられて、青い髪のかかる首元に顔を埋める。

子供をあやすみたいに頭を撫でられて、ぎゅつと手を握られた。

何かに寄りかかかっていないと折れてしまいそうで、暫くの間そうして小さな体に身を預ける。

抱きしめられたまま深呼吸を繰り返していると、次第に震えが落ち着き、散らかっていた思考がゆつくりとまとまっていた。

握っていた手で震えが止まったのを感じとったのか、チグサが俺の頭を優しく叩く。

「落ち着いた?」

「うん、いつもごめん。ありがとう、おちぐ」

「んーん。エクスの方がキツいっちゃけん、辛くなったらうちが何時でも支えるよ」

今が幸せだからこそ、英雄としての『これまで』が俺の心をズタズタに裂いて、その度に死にたくなるくらいの痛みを与えてくる。

抱きしめてくれるチグサの存在だけが、この世界で生きる俺を肯定してくれていた。

……本当に、助けて貰ってばっかりだ。

「絶対、幸せにするから」

「期待しとくね」

返事の代わりに、小さな体軀を強く抱きしめた。

……魔されるエクスを見るのは、もう何度目だろう。

穏やかに寝息を立てるエクスを見下ろし、唇を噛む。

たとえばイブラヒム先輩だったら。エクスが背負う辛さを理解出来るからこそ、一緒に抱えて、隣で手を差し伸べることが出来るだろう。

たとえばアルス先輩だったら。体は小さくとも、その頼りになる魔法でエクスを救ってあげられるのだろう。

社さんは大人としてエクスの助けになってくれるだろうし、にやらかは人外故にきつとエクスの闇を払える。

他にも、葛葉さんだったら。不破さんだったら。めとちゃんだったら。のあちゃんだったら。……私じゃ無かったら。

私と『エクス・アルビオ』を隔てる厚い壁に、堪えきれない雫が流れ落ちてくる。

苦しんでいるエクスを見ても何も出来ない自分が、どうしようもなく嫌いだ。

隣にただで、エクスが当たり前のように眠れる存在。

私がいつかそうなる事を夢見ながら、暗闇の中瞼を閉じた。